

低温と日照不足に伴う農作物の技術対策について

平成21年7月24日
いわき農林事務所

7月21日仙台管区气象台発表の「低温に関する異常天候早期警戒情報（東北地方）」によると、7月26日頃からの1週間は、気温が平年よりかなり低くなる確率が30%以上と予想されます。農作物の管理には十分注意しましょう。

【水 稲】

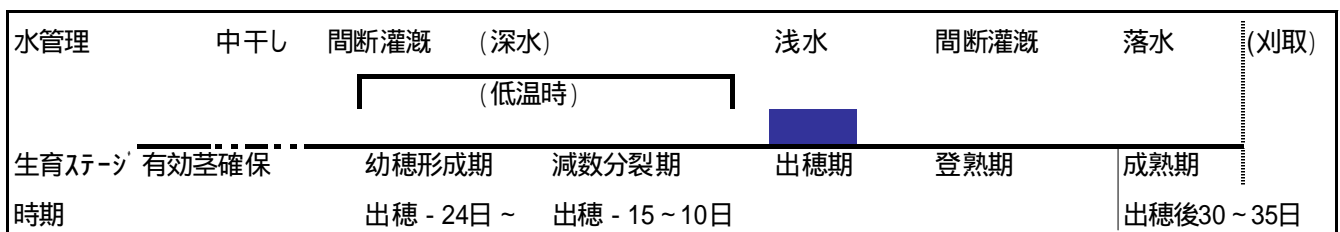
（現在の生育状況）

- ・現在は、ほとんどの地域で幼穂形成期から減数分裂期となっており、低温の影響を受けやすい時期となっています。
- ・草丈は平年並からやや短く、茎数は平年並からやや多く経過しています。
- ・出穂期は、今後の天候にも左右されますが、平年並からやや早い見込みです。
- ・葉いもちは、すでに発生が確認され、7月19日以降感染に好適な気象条件が出現しているため、今後拡大する恐れがあります。

| 地域・品種 | 幼穂形成期 | 減数分裂期 | 出穂期 |
|------------|-----------|-----------|-----------|
| （平坦部）コシヒカリ | 7/16～7/21 | 7/26～7/31 | 8/10～8/15 |
| （山間部）ひとめぼれ | 7/13～7/18 | 7/23～7/28 | 8/7～8/12 |

（今後の技術対策）

1 水管理-----今後の水管理は、低温に備え深水管理を基本としてください。



（1）幼穂形成期や減数分裂期に最低気温が17℃を下回ると予想される場合は、深水管理で幼穂を保護します。

水深は、幼穂形成期が5～10cm、減数分裂期が15～20cmを目安とします。

（2）中干し後は、間断灌漑とし、出穂から登熟初期にかけて浅水管理とします。

（3）その後は間断灌漑を行い、出穂35日後に落水します。早期落水は乳白粒の原因となります。

2 穂いもち対策

- ・ 葉いもちの感染好適条件が7月19日以降に多く出現し、発生拡大が心配されます。もし発生が見られたら、穂いもちへ移行させないために、早急に散布剤（粉剤や液剤等）で防除してください。
- ・ 穂いもちの粒剤による予防散布は必ず実施します。防除時期は各薬剤の使用法を確認し、遅れないように行いましょう。

3 稲こうじ病対策

- ・ 穂ばらみ期が低温で日照が不足し、降雨の多い年に多発します。前年多発したほ場や日陰で葉が濡れている時間が長いほ場では多発する傾向があります。
- ・ 薬剤による防除は、粒剤や散布剤で薬剤の防除時期を確認して行います。なお、銅を含む薬剤は、出穂10日前までに散布をしますが、葉が濡れている場合は薬害が出やすいので注意してください。

4 穂肥

- ・ 穂肥を施用する際は、生育診断に基づき行い、いもち病の防除も併せて実施してください。
- ・ コシヒカリは、出穂前15日に草丈85cm以上、葉色値3.5以上であると倒伏する可能性が高くなります。このような場合には穂肥は控えてください。

【大豆】

（現在の生育状況）

出芽は一部で不良となり、再播種が行われましたが、全体的には概ね良好で、その後の生育も順調に経過しています。

（今後の技術対策）

- ・ 降雨が続く場合、排水路の見回りや排水溝の整備と手直しを行い、停滞水をなくすなど、排水対策を徹底しましょう。
- ・ 湿害がみられるほ場では、排水対策を行った後に中耕培土を行いましょう。また、生育が抑えられている場合は、硫安や尿素等の速効性肥料を追肥しましょう。
- ・ 雑草が発生しているほ場では、中耕や茎葉処理剤等により確実に雑草を抑えましょう。

【野菜】

（現在の生育状況）

いわき管内におけるきゅうり、トマト、さやいんげん等の現在の生育は概ね順調です。

（今後の技術対策）

1 低温・日照不足時の栽培管理

- (1) 追肥は1回当たりの窒素分量を少なくし、窒素過多にならないようにしましょう。
- (2) ハウスの場合は、適正な温湿度管理に努め、病害を予防しましょう。
- (3) 低温・日照不足条件下では軟弱徒長ぎみに生育しているので、黄化葉や過密葉、病葉は随時摘除するとともに、着果負担が大きい果菜類では草勢に応じて摘果しましょう。

2 排水対策

雨が続いた場合に過剰な水分が停滞しないよう、畦間の高低や明渠、側溝などを確認しましょう。過湿による根痛みは、草勢低下・病害の原因になります。

3 病害対策

低温・日照不足等の下では軟弱ぎみの生育となり、草勢が低下し病気が発生しやすいので、気象の推移と生育状況をみながら適正な防除に努めましょう。

また、過繁茂の黄化葉や老化葉は摘葉し、風通しを良くしましょう。

4 主な品目の技術対策

- (1) きゅうり（露地）：べと病、つる枯病等の発生が多くなるので防除に努めましょう。また、不良果を摘果し、草勢維持を図りましょう。枝の動きは緩慢となるので、側枝の摘芯は強く行なわないようにしましょう。
- (2) トマト：追肥は、窒素過多にならないように少量ずつ施用し、草勢維持に努めましょう。また、灰色かび病、葉かび病、疫病が発生しやすいので、ハウス内の換気を図るとともに、薬剤散布や花かす（花卉）除去により防除しましょう。
- (3) さやいんげん：灰色かび病、炭そ病等の発生に注意しましょう。
- (4) いちご：鉢上げが終わらない方は、早めに行いましょう。うどんこ病の発生が多いため、防除に努めましょう。
- (5) ねぎ：秋冬ねぎについては、アザミウマ類の発生が増えています。乾燥時と降雨時に合わせた薬剤を選定しましょう。また、軟腐病の発生時期ですので、適切に防除しましょう。
- (6) アスパラガス：茎枯病の発生が多くなるので防除に努めましょう。茎枯病が発生した場合は、被害茎葉を地際部から抜き取り焼却します。また、調整後の穂先のトロケに注意しましょう。
- (7) ブロッコリー：播種～育苗時期となっています。発芽開始後に被覆資材の除去が遅れると徒長するので注意しましょう。日照不足下での夕方かん水は徒長につながるのを避け、軸足のしっかりした苗作りを心がけましょう。

【 果 樹 】

(現在の生育状況)

ナシの肥大状況は平年より20%程度大きい状況です。

(今後の技術対策)

1 栽培管理

誘引等により樹冠内部の日当たりを確保しましょう。

着果量が多い園では、果実肥大を促すため速やかに修正摘果を行ってください。

「豊水」で果実のバラツキが多く、新梢が二次伸長していない場合は、満開後100日(7月25日)頃に小玉果と変形果を摘果します。

2 病虫害防除

低温・日照不足条件下は黒星病の感染・発病が懸念されますので、低温・日照不足が続き、前回の散布から7～10日以上散布間隔が開くようであれば、散布間隔に注意し防除してください。また、発病した葉や果実は摘除し、園外に持ち出して適切に処理してください。